三陸は幾度となく津波に襲われてきた。なかでも宮古市田老（たろう）は「津波太郎」と呼ばれるほど惨禍に見舞われてきた。江戸時代初期の慶長三陸地震による津波で村は壊滅。明治29年の明治三陸大地震による津波では、村民の8割に当たる1859人が落命した。昭和8年の昭和三陸大津波でも911人が亡くなり、三陸全体の犠牲者の3割以上を占めた。

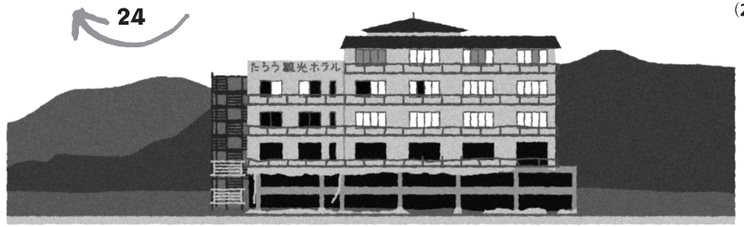
昭和三陸大津波後、政府は高台移転を推奨する。だが、田老は独自に防潮堤の建設を決断した。住民の多数を占める漁師が高台移転を希望しなかったのだ。昭和9年に着工し、戦争を挟んで昭和33年に完成した高さ10メートル、長さ1350メートルの防潮堤は、日本では類を見ない規模だった。その威容から「万里の長城」と呼ばれ、国内外から防災関係者が視察に訪れた。田老の防潮堤はまちのシンボルとなっただけでなく、日本の津波対策のモデルケースと位置づけられたのである。

変わる日本の「暮らし」と「まち」 24

まちぐるみの高台移転を決断

岩手・田老（たろう）地区防災集団移転促進事業

（2013年◆平成25年から実施中）



新田匡央
にった・まさお
illustration：Shigeyuki Sakata

◆万里の長城への過信

とはいえ、田老の住民は津波の怖さを熟知する。津波に対する備えは、親から子、孫へと伝えられた。代々田老に住む女性は語る。

「『つなみてんでんこ』です。地震が来たら、とにかく高台に逃げろと言われてきました。大事なものをかばんに詰め、寝るときは服をたたんで枕元に置く。暗闇でも逃げられるようにするためです」

復興後のまちは碁盤の目状に整備され、海からの道はすべて高台に通じるようになった。新たに2本の防潮堤も作られ、まちは完全に防潮堤に囲まれた。まちをあげての避難訓練も繰り返された。

平成15年、田老は「津波防災の町宣言」を発表する。その一節には「近代的な設備におごることなく（中略）地域防災力の向上に努め」と書かれている。津波太郎の異名を取った田老は、堅牢な防潮堤だけに依存しない防災意識の高いまちに生まれ変わった。

平成23年3月11日。73歳の女性は「揺れ方が違う。津波が来ると思って、すぐに家を飛び出しました」と振り返る。しばらくすると町の防災無線は3メートル以上の大津波が来ると叫んだ。3メートルなら防潮堤を超えない。そう判断した人が、高台から自宅に戻った。その瞬間、津波は防潮堤を超え、人々を飲み込んだ。

田老を襲ったのは16メートルにも及ぶ「黒い波の壁」だった。

「堤防の上に海が見えた感じ。あれは波なんてものじゃない」

実際に津波を見た住民は口を揃える。黒い壁は1691戸を押し流し、まちは跡形もなく消え去った。田老の犠牲者は181人を数え、不幸にも津波太郎の歴史が繰り返されることになった。

防潮堤の奥の山肌に高台の宅地が造成されている

◆高台には天然の防潮堤も

自身の家も被災した宮古市長の山本正徳氏は、2日後には甚大な被害を受けた田老に足を踏み入れた。まずは被災者の生活の立て直しに全力を注ぎ、見通しが立つとまちの復興を考えた。防潮堤だけで津波を防ぐのは不可能だ。それが偽らざる思いだった。

「自然相手のことなので、絶対はありません。そこで優先順位をつけました。最優先は人命、次が住居と子どもたちの施設です。住居にはお金で買えない財産が詰まっていますし、まちの未来を担う子どもたちが通う場所を災害から守らなければなりません」

市長の思いから導かれる答えはひとつだ。だが、決して住民に押しつけなかった。市長は避難所をくまなく回り「どんな場所に住みたいか」と住民に問いかけた。その声を丹念に拾い、住民の高台移転と防潮堤の再建を決断する。

すぐに、移転場所の選定から開発までを担う先を探した。優先したのはスピードである。一刻も早く住民の生活を取り戻すためには、市の人手だけでは時間もノウハウも足りない。浮かんだのは経験豊富なURだった。URが震災後いち早く市に入り、信頼関係が構築されていたことも大きかった。

「こんな所に、本当に家が建てられるのだろうか」

何気なく見上げていた山の斜面に、広々とした平地が整えられていく。それだけではない。津波に悩まされてきた田老だが、海の恵みで生きてきたのも事実だ。住民の気持ちを考え、海が一望できる場所を選んだ。しかし海が見えれば津波の通り道にもなる。海抜30メートルの高さとはいえ、いつか来る津波の高さは想像もつかない。住民に高さ以外の安心感を与えるため、宅地と海の間に小高い山と林を置く形に設計し、天然の防波堤を築いた。

「いい場所を選んでくれました」

市長は謝意を示す。その言葉に対し、UR岩手震災復興支援局長の佐々木功はこう強調する。

「URでは、4つの柱で復興のお手伝いに臨んでいます。主役は市町村であること。スピードを加速すること。地元の意見を聞き、地域に根差したまちづくりをすること。そして、地元にお金と雇用が回るようにすることです」

二人三脚で進む田老のまちづくりは、来年の夏に新たなステージに入る。高台の造成が完了し、285戸の住宅と保育所など公共施設の建設が始まる予定だ。

まちにポツンと残された建物がある。たろう観光ホテルだ。津波は3階から下を破壊し、鉄骨がむき出しのままだ。ホテルは第1号の震災遺構に認定され、国費による保存が決まった。熱心に働きかけたのは市長本人だという。

「津波の高さだけでなく、コンクリートを破壊するほどの威力も伝えるべきだと思ったからです」

市長はさらに続ける。

「昔に比べて避難の動き出しが遅くなっています。防潮堤を過信せず、まずは逃げる。防災意識の高い田老ですが、もっと意識を高める必要があると思っています」

津波はまた必ず襲ってくる。尊い命と思い出の詰まった家が失われることのないよう、防災のまち田老の挑戦は続く。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社